



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光客のメディア・パフォーマンスによる〈観光地〉の形成：メディア空間と物理空間の相互作用に着目して〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金, 千
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16534号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95710
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	JIN_Qian_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：金 千

審査委員	主査	准教授	渠 蒙
	副査	教授	山村 高淑
	副査	准教授	天田 顕徳

学位論文題名

観光客のメディア・パフォーマンスによる〈観光地〉の形成

メディア空間と物理空間の相互作用に着目して

本論文は、観光客によるメディア・パフォーマンスが観光地形成に与える影響を考察し、観光空間がいかに動的に生成されるのかというプロセスを解明するものである。観光客は自己表現の一環としてメディアを積極的に活用し、その行為が観光地の価値や意味の変容に寄与している点に着目している。本研究は、こうした観光客によるメディア・パフォーマンスが観光地の「現実」を再構築する過程に焦点を当てるものであり、観光研究における理論的・実証的貢献は極めて大きい。近年の観光研究においては、観光地を固定された空間として捉えるのではなく、観光客の身体的な行為やメディアを通じた相互作用のなかで生成される動的な場として理解する視点が重視されつつあるが、本論文はその最前線の議論を担うものである。

特に注目すべきは、観光客がソーシャルメディア上で観光経験を共有することによって、観光地の認識が変容し、新たな観光現象が創出されるプロセスに着目している点である。申請者は、パフォーマンスに関する理論を分野横断的かつ緻密に整理したうえで、独自の視座から〈メディア・パフォーマンス〉という概念を定義し、それがいかにして〈観光地〉を形成するのかを、複数の事例を通じて実証的に明らかにすることに成功している。

審査委員会においては、本論文に関し、特に以下の二点において高い評価がなされた。

第一に、理論構築における学術的貢献の大きさである。申請者は、観光パフォーマンスに関する既存の議論を、芸術学、人類学、社会学などの隣接分野にわたって横断的に整理・検討し、さらに人文地理学、メディア研究、メディア地理学における「文化論的転回」および「空間論的転回」をふまえて、「メディア空間と物理空間の相互作用」や「メディア実践による観光空間の再構築プロセス」を把握・分析するための新たな理論的枠組みを提示している。このように、現代的な観光現象およびメディア環境に対応可能な、観光地形成プロセスを説明する視座を理論的に導き出した点は、観光研究にとどまらず広く関連諸分野においても今後の研究を促進し得る重要な学術的成果であると評価された。また、観光空間の生成とオーセンティシティ

をめぐる議論に対しても新たな視点を提示しており、観光研究における理論的枠組みの発展に資する点も特筆に値する。

第二に、上述の理論的枠組みを具体的事例を通じて実証的に検証している点である。申請者は、マルチモード・アプローチおよびオンライン・エスノグラフィーを用い、複数のケーススタディを通じて、理論的に導出された仮説を丁寧に検証している。その結果、観光客によるメディア・パフォーマンスが、観光地の形成プロセスにおいていかに作用しているのか、また観光地が観光客の表現行為を通じていかに動的に生成されていくのかについて、一定の実証的知見を示すことに成功している。

以上の二点に示されるように、本論文の意義は、観光におけるパフォーマンス論を理論的に整理し、それを観光研究の枠組みの中で発展させた点にある。先行研究を的確に踏まえながら、仮説の構築とその実証的検証を行い、明確な結論へと至る一連の研究手法は、学術的にも高く評価できる。また、本研究では「ポスト・パフォーマンス」および「メディア・パフォーマンス」という新たな概念を導入し、観光地の形成過程に関する理論的理解を深めると同時に、観光実践に対する重要な示唆を提示している点も、本論文の顕著な学術的貢献である。以上のような本研究の学術的貢献度、新規性、ならびに独自性を総合的に勘案し、審査委員会は、本論文が博士学位申請論文としての水準を十分に満たしていると評価した。

一方で、口頭試問においては、本研究に関する課題および限界について、以下のような指摘がなされた。

第一に、観光研究におけるパフォーマンス論を展開するにあたり、その理論的起源のひとつである社会学において当該概念がどのように形成され、そこから観光研究の文脈においていかに受容・発展してきたかを、より明示的に示すことで、論理展開の一貫性が高まり、読者の理解を一層促進できるのではないかと意見があった。

第二に、引用の整理や理論の扱いに関して、どの理論をどのような意図で採用し、それに対して本研究がいかなる独自の視点を提示しているのかを、より明確に記述することで、読者の誤読を避けるとともに、研究の独自性をより強調できるのではないかという指摘がなされた。

第三に、研究方法の記述に関して、「ビジュアル・エスノグラフィー」や「オンライン・エスノグラフィー」といった方法論が論文中で言及されているが、それらが本研究において具体的にどのように適用されたのか、またどのようなデータを収集し、いかなる手法で分析を行ったのかについての記述がやや不明瞭であり、より具体的かつ詳細な方法論の説明を行うことで、分析結果の説得力が増すのではないかと指摘があった。

さらに、結論部分に関しては、今後さらなる展開や構成の工夫の余地があるとの意見も示された。特に、複雑な語彙や図表の表現については、簡潔かつ明瞭に整理することで、読者にとってより理解しやすい内容となる可能性がある。

なお、これらの指摘は、申請者の研究者としての今後の一層の発展を期待しての建設的な助言であり、本論文の学術的価値や、観光研究における理論的・実践的貢献の高さを否定するものではない。また、こうした指摘に対しては、学位申請者より都度適切かつ誠実な応答がなされ、研究への深い理解と主体的な姿勢が確認された。

以上を総合的に勘案し、審査委員会としては、本論文を博士学位論文として「合格」と判定するものである。